民俗儀礼に残る早瀬の歴史

森　隆男

一　はじめに

福井県美浜町は、名称のように、若狭湾に面した美しい、そしてゆるやかな海岸線をもつ町である。遠浅の浜には多くの海水浴場が整備され、夏には観光客でにぎわう。

美浜町の西方にそびえる岳山は海抜一九二メートルの低山であるが、山頂からながめる若狭湾や三方五湖の景観はすばらしい。その東側の山麓に早瀬の集落が広がっている。早瀬は戸数約二三〇、人口約七四〇人の大きな集落である。近世後期の文化四年（一八〇七）の史料に戸数二二三、人口一、〇二四人とあり、近世にはこの地方の中心的な町であったことがわかる。明治四十二年の史料にも二〇六戸、一、三三六人の人口が記録されている。

早瀬は千歯扱の生産地として知られていた。天保五年（一八三四）に寺川庄兵衛が出雲や伯耆から取り寄せた鉄を原料にして、焼付の刃を用いた優れた性能をもつ千歯扱を開発したのである。最盛期には、鍛冶職人が二〇人程度いたといわれている。まず農家に製品を納め、後で別の人物が代金を回収する方法で、全国的に販売を展開した。しかし大正から昭和初期に普及した足踏式脱穀機の登場で、千歯扱の生産は急速に衰退した。

写真１　岳山の中腹からみた早瀬の集落

千歯扱の生産販売が早瀬の経済を支えた時代があったことは事実であるが、それ以前から多くの人びとが住む町であった。しかし集落の背後には山が迫り、耕地は見られない。これだけの人口を支えてきた経済的基盤を考える時、海と関わる生業を考えざるをえない。

早瀬には神子や遊子など常神半島の漁民が海産物を運んできた。この集落には、それらを各地に販売する仲買業が三〇軒ほど営業している。現在の魚市場は海に臨んで設けられているが、昭和二四年までは集落の南端の早瀬橋を渡ってすぐの久々子湖に面した場所にあった。そのため海産物だけでなく、モズクガニなど淡水産の魚介類も入荷した。

写真２　集落を貫く古い道

ここには馬がいないため、人びとは魚の荷を背負って熊川宿へ運び、荷を受け継いだ人がそこから近江や京都へ運んだ。岐阜や名古屋に運ぶルートもあった。熊川宿はかつて若狭最大の宿駅で、物資流通の拠点であった。鉄道の開通後は、貨車で各地に運送された。奈良県の五條市まで運ぶこともあったようである。一方、近郊農村にはリヤカーで行商に行く人も多かった。

以上のように、近世以降の早瀬は千歯扱の製造と販売の時代をはさみ、水産物の集散地として繁栄した。そのため地元の人の多くは、早瀬には漁師が少なかったと主張する。

二　文献からみた早瀬浦

文政二年（一八一九）の史料には、戸数二三三戸、人口は男性四八〇人、女性五一二人、男性の職業は農業二人、雑業七五人、工業二七人、漁業五四人、行商二九人、諸業二九人、女性の職業は農業四人、雑業七〇人、行商二二人、諸業三二人とある。人口と戸数は前出

の文化四年当時のデータと大きな変化はない。男性の工業従事者は、千歯扱以前に当地で生産されたといわれるノコギリの製造に関わる人であろう。男女の行商人の多くは、魚介類の振り売りとみてまちがいなかろう。

男性の雑業と諸業、女性の雑業に従事する人数の多さが目につく。具体的内容は不明であるが、そのうちの多くは魚介類の運搬など水産物の流通に関わる人であろう。また近世から明治初期にかけて北前船による物資が、若狭では三国や敦賀、小浜に運搬されてきた。桐実油や昆布・塩などがその主なものである。小型の廻船でこれらの港から各地に運ぶ仕事に携わった人びとの人数も、この中に含まれていると考えられる。ちなみに慶長七年（一六〇二）の「若狭国浦々漁師船等取調帳」には、早瀬浦に籍を置く船の数が四一艘、水主一四二人とあり、三方郡では船の数は三番目であるが水主の人数は最多である。西廻り航路が開かれる前から、早瀬には船による運送業が行なわれていたようである。

早瀬には、物資の流通に関わって出入りする男性たちのために旅館や飲食店などが営業し、港町としての景観を呈していた時代があったはずである。第二次世界大戦まで五軒の旅館が営業し、飲食の相手をする女性も働いていた。しかし当時の隆盛を語る伝承はほとんど聞くことができない。蛭子神社の境内に常夜灯が三基残されている。このうちの一基に銘があり、文久四年（一八六四）に「大阪屋半七」が寄進したことを知ることができる。大阪出身の商人が当地での商売の隆盛を祈願または感謝して奉納したものであろうか。

さて、男性のうち五四人が漁民であったことに注目したい。具体的な漁業形態は不明であるが、早瀬浦の主たる職業の一つであったことは確かである。早瀬浦には中世から近世にかけての区有文書約千二〇〇点と上野山家文書が残されており、それらのうちの一部が『若狭漁村史料』に収録されている。これらによると少なくとも近世初頭には惣有の網場が数ヶ所あり、常神半島の東側にある竈ヵ崎に大綱を所有していたことがわかる。とくに大綱は十六世紀前期には存在していたとされ、全体の構造が上野山家文書の絵図に示されている。上野山氏の網場年期請状から、アジやフグを漁獲していたこともわかる。さらに早瀬浦の申し合わせに「蛸縄漬」があり、タコの延縄漁が行なわれていたことも知ることができる。

なお文化八年（一八一一）の船数は廻船九艘、漁船五一艘である。近世後期の段階では廻船に比較して漁船の数が多い。

以上のように文献で得られる漁民の情報は伝承されている状況とは異なり、かつて漁民の活動はかなり活発に展開していたことが予想される。

三　漁村の残像

早瀬には氏神などの祭祀において、専門の神職である宮司のほか、住民の中から選ばれて儀礼の執行役をつとめるホウリ（代祝部）がいる。前年にホウリをつとめた者をアイトウ（相当）と呼ぶ。このような制度は若狭地方の他の村にもあるが、いずれも漁村である。

さて寛文七年（一六六七）の『若州見分記』にみられる早瀬の祭礼は、一月三日に行なわれる地之神社の「的射マ子ヒ」、一月八日などに行なわれる山王社の「造酒御供」、六月二十九日から晦日にかけて行なわれる水無月神社の例祭である。一月三日の祭礼は浜祭りまたはハツユミの名称で現在も行なわれている。地之神社は蛭子神社である。ホウリが「当浦へ参そうまじきものは、天下の不浄、内外の悪神、病むということ、風の難、火の難、千里の外へ射やろう」と大声で唱えながら一本目の矢を海に向って射る。続いて「当浦へ参るべきものは、京の白河、銭、米、七珍万宝、富、幸、美濃国の糸、錦、当浦へ納まる」と唱えて二本目の矢を家並みに向けて射る。山王社は日吉神社を指すが、一月八日

の祭礼については不明である。また水無月神社は水無月三光神を祭神とし、明治四十一年に日吉神社に合祀された。水無月祭は早瀬を代表する祭礼の一つとして現在も七月二十七日から二十九日にかけて盛大に行なわれている。近年、祭日が七月下旬の金曜日から日曜日までの三日間に変更された。

水無月祭の準備は七月二十六日から始まる。朝八時から御旅所に御仮屋を建てる作業を行なう。御旅所はかつて水無月神社が鎮座していた場所にあり、久々子湖から敦賀湾に流れる川の南側にあたる。境内に約四メートル四方、高さ約五メートルの二階建ての御仮屋を建てる。屋根は板材である。

二十七日の朝十時に神輿が氏神の日吉神社を出発し、参道を通って海岸に出る。そこから水無月丸と弁天丸の二艘を並列につないだ神輿船にのせ、渡御を始める。神輿船の引き船にはこぎ手二人と棹取り一人が乗り込んだ。引き船は昭和三〇年代から機械船に変わった。約二〇分かけて御旅所の沖に到着するとすぐには上陸せず、担ぎ手たちは「ヨイヤサ、ヨイヤサ」の掛け声をあげながら海の中で神輿をまわす。上陸後も御旅所付近の畑を荒らしながら神輿を担ぐ。御仮屋の周囲を右まわりに三回旋回させて、ようやく神輿を御仮屋の二階部分に安置する。しかし、このように神輿が大暴れをしたのは担ぎ手の漁民が多かった昭和二〇年代までであった。御仮屋の一階にはホウリやアイトウなど講中の人々が二十八日の夜まで籠もる。

二十七日の午後は高張提灯などを飾り立て、夕方から始まる宵宮に備える。宵宮にはかつて多くの露店が並び、近郷からの参拝者でにぎわった。

二十八日は本祭当日だが、とくに神事等は行なわれない。二十九日午後二時頃、担ぎ手たちが神輿を持ち上げ、まず御仮屋の周囲を右回りに三回旋回させて海岸に出る。そこで練り、神輿船にのせて二十七日と逆のコースで本社に還幸する。

水無月祭で主役となるのは、神輿を担ぐ漁民である。第二次世界大戦直後の昭和二〇年代は、復員してきた男たちの仕事がなく、多くの者が漁業にたずさわった。そのため神輿

写真3　水無月祭で日吉神社を出発する神輿（浜野寿氏提供）

写真4　海上を渡御する神輿船（浜野寿氏提供）

写真5　御旅所に設置された御仮屋（網谷誠一氏提供）

の担ぎ手が急増して、還御後、本社の境内で二十三回も神輿をまわしたことがあったという。祭礼は現在五つある町が交代で当っているが、かつてはホウリの親類縁者が中心になって執行していた。

現在のような渡御のコースは日吉神社に合祀された明治四十一年以後のことで、それ以前のコースは不明である。おそらく集落の南にある現在の御旅所を起点にして、集落の北に設定された旧御旅所まで往復するコースが存在していたのではなかろうか。ここで確認しておきたいのは、祭礼の形態が近年調査した大分県日出町深江などと同様、典型的な漁民の祭礼である点である。

四　堂の講、そのほかに残る漁民の信仰

毎年一月三日、集落の北の端にある奥ノ堂で興味深い儀礼が行なわれる。「堂の講」と呼ばれるこの儀礼は、二〇年ほど前までは一月四日に行なわれていた。米や粟、稗など五穀を阿弥陀如来像に供え、参加した講員に神酒の入った盃がまわされる。そのあとアルキが二本のハナドリをカチカチと打ちながら、タイ、イワシ、ブリ、ヒラメ、スズキなど次々に魚の名前をあげながら堂の中をまわる。最後に「コウナゴ」の名前をあげると、参加者が「タカリがあがった」と言うやいなやアイトウがアルキの頭の上にタモアミをかぶせる。参加者が拍手をして祭礼を終了する。

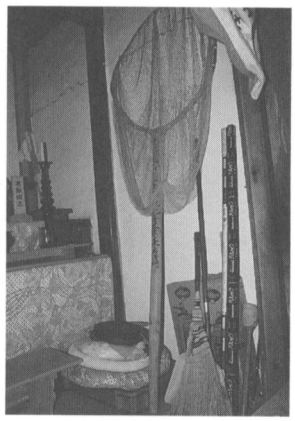

写真6　堂の講の儀礼で使われるタモアミ（奥ノ堂）

アルキは集落内の伝達係をつとめる人である。ハナドリは、長さ一〇センチメートル、直径約五センチメートルの棒で、先端に割れ目が入っている。毎年十二月十三日に蛭子神社のタモの木を切って作る。マトリという海鳥を模したものといわれている。ハナドリは儀礼のあとホウリをつとめた者の印として玄関に打ちつけておく。魔よけの装置でもある。タカリは海水面近くに浮上した魚群をさす。アルキはすでに廃止され、当番町のだれかがアルキの役をつとめた。現在はアイトウがこの役をつとめ、タモアミをかぶせる役はホウリである。

一見、滑稽な儀礼であるが、金田久璋氏が指摘するように年頭に行なわれる豊魚の予祝儀礼で、アルキがつとめた役は豊漁を約束する神であった。注目したいのは、この儀礼はあくまでも漁獲を生業とする漁民の儀礼であり、仲買人のそれではないことである。一時中断しながらも、この儀礼が伝承されてきたところに早瀬が漁村であったことの名残を認めることができよう。ちなみに奥の堂は、以前は「沖の堂」と呼ばれ海岸近くに建ってい

写真7　玄関に打ちつけられたハナドリ

た。延宝三年（一六七五）に編纂されたとされる『若州管内社寺由緒記』にもみえる。第二次大戦後、現在地に移された。

そのほか、一月一〇日には氏神日吉神社の社務所に漁民が籠もり、僧侶二人を招いて大般若経を転読する。その際、僧侶が豊漁の祈願をする。また早瀬には多くの講が盛んに営まれたが、行者講などの場では必ず「豊漁」を口にして祈願するという。行者講は、岳山の中腹にある行者堂で一月と六月の六日に行なわれた。現在は講員が高齢化したため、老人会館で行なわれている。

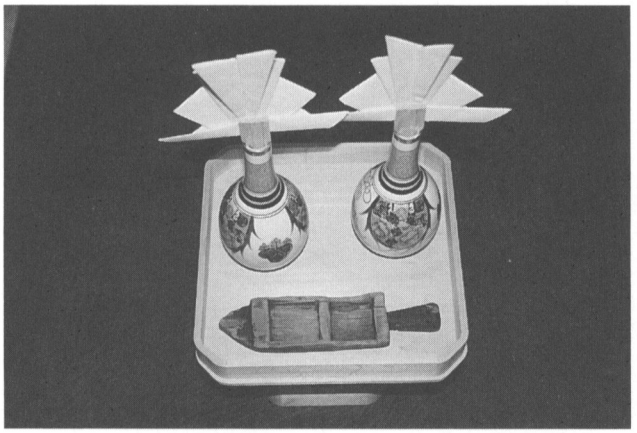

写真8　正月の供物をのせるフナダマサマ（手前船形の容器）

網谷誠一氏宅では、正月の供物をフナダマサマと呼ぶ船形の容器に入れて供える。これは長さ一九・三センチメートル、幅五・〇メートルの木製で、船首側に田作り、船尾側に餅を入れる。徳利と一緒に三方にのせて床の間に置く。

このように、住民が意識しているかどうかは別にして、いたるところに漁民に関わる儀礼が残存している。

五　住民の意識と儀礼のギャップ

住民の意識の中にはほとんど消滅してしまった漁村としての記憶が、年頭の儀礼の中で伝承されているといえる。

近世以降、数度にわたる埋め立てにより海岸線が海に向って拡大し、比較的広い町場が登場した。現在、町の中を歩いても漁村の名残を伝えるものは見られない。しかし近世の海岸線は山裾と海の間の半分程度のところにあり、狭い一本の道路をはさんで両側に家並が続く細長い集落であったと伝承されている。そうであったとすると、現在久々子湖畔や日向湖畔などにみられる漁村と同じ景観であったことになる。漁村景観の喪失が、漁村の記憶を消してしまったといえるのではなかろうか。

すでに年頭に豊漁を予祝するという役割を失った堂の講が、中絶しながらも再度復活して営まれていることは驚くべきことといえる。民俗儀礼の生命力をみる思いである。

本稿の執筆に際して、栢野利朗氏や網谷誠一氏など地元の皆様に貴重な情報を提供していただいたことに感謝します。

参考文献

早瀬郷土史研究会編『早瀬乃里』一九七二
福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編『若狭漁村史料』一九六三
『わかさ美浜町誌』第一巻　暮らす・生きる　二〇〇二
『わかさ美浜町誌』第二巻　祈る・祀る　二〇〇六
金田久璋『あどうものがたり―若狭と越前の民俗世界―』二〇〇七　福井新聞社
岡田孝雄氏「昔の早瀬」講演資料　他